

論 説

## 平成30年7月豪雨における学生ボランティアの意識

松村 暢彦 (環境デザイン学科)

渡邊 敬逸 (環境デザイン学科) ・羽鳥 剛史 (環境デザイン学科)

Research on Volunteer Students Consciousness to Disaster  
Restoration in the Heavy Rain Event of July 2018

Nobuhiko MATSUMURA (Environmental Design)

Hiromasa WATANABE (Environmental Design) ・Tsuoyoshi HATORI (Environmental Design)

キーワード：平成30年7月豪雨、学生ボランティア、社会的学習理論、自己効力感、愛大コンピテンシー

Keyword：Heavy Rain Event of July 2018, Student volunteers, Social learning theory, Self-efficacy, Ehime University Competencies Standards for Students

【原稿受付：2018年12月25日 受理・採録決定：2019年1月8日】

### 要旨

本稿では平成30年7月豪雨で社会共創学部が行ってきた災害ボランティア活動支援の概要を報告するとともに、学生のボランティア活動が学生の成長の契機としてどのような教育的効果をもたらすのかについて明らかにした。社会共創学部では災害ボランティア活動支援として、ガイダンス資料の作成、備品・消耗品の購入等を行い、のべ360名を超える学生・教職員がボランティアに参加した。ボランティアに参加した学生アンケートから災害ボランティア活動に対する重要性認知や自己効力感が高く、それらが今後の災害ボランティアへの参加意向に影響していること、今後の大学での学習の動機づけとして災害ボランティア活動が機能していることが明らかになった。また、災害ボランティア活動での経験を通して得られた学びは、愛大コンピテンシーの各能力に位置づけられることが明らかになった。

### 1. はじめに

平成30年7月豪雨では、愛媛県下で死者27名、全壊632棟、半壊3212棟、床上浸水360棟、床下浸水2692棟と大きな被害を出した(愛媛県災害対策本部, 2018)。特に宇和島市、大洲市、西予市では大規模な土砂崩れ、河川の氾濫などが発生し、現在でも多くの方々は仮設住宅での暮らしを余儀なくされている。愛媛県では26000名を超える災害ボランティアが災害直後から活動を行い、復旧に向けて被災地の支援を行ってきた(社会福祉法人全国社会福祉協議会, 2018)。愛媛大学においても7月9日に危機対策本部を設置し、災害調査団を結成して被災地の情報収集、現地調査を行うとともに被災市町へ医療支援等の直接的支援やボランティア・サポートセンターの設置を行ってきた。また、学生、教職員が直後から平成30年11月21日までの間で、延べ1351名が災害ボランティア活動を行った(愛媛大学, 2018)。

これまでも大学生がボランティア活動を行うことの教育的効果について様々な実践事例が報告されている。たとえば、新潟県中越地震での活動報告では、学生が有意義なボランティア活動を展開できた背景に状況的関心(論理的な一貫性に基づかずに語られるとこ

ろの関心)の存在を指摘している(諏訪ら, 2005)。また、弘前大学において実施された正課教育である東日本大震災復興論の教育効果を検証した報告(飯ら, 2012)や大規模学生調査を用いてボランティア経験が学修行動へ肯定的な影響をもたらすことを示している(河合, 2011)。これらの研究では、ボランティア活動への参加と学習効果との関連を尋ねているが、教育効果については、学生はボランティア活動においてどのような経験をしてどのような学びを得ているのかについて具体的に明らかにしていくことが求められる。また、学生がどのように動機づけられて災害ボランティアに参加したのか、そして今後も参加しようと思ったのかについて理解していくことも必要とされる。それらを踏まえて本稿では、平成30年7月豪雨で社会共創学部が行ってきた災害ボランティア活動支援の概要を報告するとともに、学生のボランティア活動が学生の成長の契機としてどのような教育的効果をもたらすのかを明らかにする。

本稿では、教育効果について経験学習の枠組みを用いてアンケートの自由記述欄から読み取った具体的経験と学びを愛媛大学として期待される能力、愛大コンピテンシーと対応づけて解釈する。また、人が達成行

動を起こす動機づけの代表的な理論のひとつである社会的学習理論を念頭に置いて災害ボランティアへの参加意向をモデル化することとする。ここで適用する社会的学習理論は、行動の動機づけの重要な要因として、達成されるべき目標の価値、すなわち主観的な重要性和目標の達成可能性があげられる。前者は重要性認知と知られ、達成動機づけ研究の領域において多くの研究の蓄積がある。後者の目標達成可能性は自己効力感に相当する。Banduraは、「ある行動を遂行することができる、と自分の可能性を認識していることを自己効力感と呼び、自己効力感が強いほど実際にその行動を遂行できる傾向にある」と述べている (Bandura, 1977)。この理論では「やる気がない」といった現象を達成動機が低いからといった人格的要因に説明しようとするものではなく、自分の行動によって結果を変えることができるという主観的な統制感が重要な役割を果たすことを強調している。こうした自己効力感については、これまで進路選択や疾病予防、運動スキルの習得などの領域において自己効力感の変動が実際の行動変容に影響があることが示されている。

## 2. 災害ボランティアの活動概要

社会共創学部では省察的实践、『「現場で実践する専門家」の専門性は現場の実践の中にある「知と省察」にある』(D.シオン, 2007)をもとに教育カリキュラムを組み、教育活動を行っている。正課教育、準正課教育ともに経験学習理論の枠組みを用いて実践、内省化、概念化、新しい状況への応用のサイクルを回すことができるように1年生から社会共創ポートフォリオ (ecrip) を作成している (山中ら, 2017)。本稿で取りあげている災害ボランティア活動も準正課教育 (一部正課教育も含まれる) として位置付けていることから、事前学習を通してボランティア活動について学ぶとともにボランティア活動をするために学ぶこととした。さらに、ボランティア後のアンケートや振り返り活動を通じてボランティアを通して学ぶように設計した。具体的には、事前学習として、これまでの経験を踏まえてボランティア活動参加ガイドランス資料を作成・講演し、事後学習としては経験学習を踏まえたアンケートとecrip活動を行った。

社会共創学部では平成30年7月豪雨に際し、災害ボランティアとして7月14日 (土) から8月5日 (日) の期間に延べで教職員56名、学生302名 (うち26名は他学部・院生)、その他2名の計360名の派遣を支援した (表-1)。派遣支援先である大洲市、西予市野村町、宇和島市吉田町の3地域に大学のマイクロバス (もしくは民間の借り上げバス) で行き、各市のボラ

表-1 社会共創学部災害ボランティア派遣支援実績

月日	地域	教職員	学生	その他	計
7/14 (土)	大洲	5	14	0	19
7/14 (土)	野村*	4	42	0	46
7/15 (日)	大洲	5	17	0	22
7/15 (日)	野村*	3	42	0	45
7/16 (月)	大洲	5	22	0	27
7/16 (月)	野村*	3	42	0	45
7/19 (木)	野村	4	13(1)	0	17
7/19 (木)	大洲	3	10(7)	0	13
7/20 (金)	野村	7	12	1	20
7/21 (土)	吉田	3	14(1)	0	17
7/22 (日)	吉田	2	9	1	12
7/23 (月)	野村	1	10	0	11
7/24 (火)	野村	2	11	0	13
7/25 (水)	野村	2	22(1)	0	24
7/28 (土)	野村	1	6(5)	0	7
7/31 (火)	大洲	1	6(2)	0	7
8/4 (土)	野村	2	5(5)	0	7
8/5 (日)	野村	3	5(4)	0	8
合計		56	302(26)	2	360(26)

\*は正課教育 (フィールド実習) での実施  
( ) 他学部・院生で内数

表-2 災害ボランティア参加ガイドランス資料内容

項目	内容
7月豪雨愛媛県被害状況	愛媛県の被害状況について死者、全壊、半壊、床上浸水等について説明
今回の災害の規模感と必要なボランティア数	平成29年7月九州北部豪雨災害等と比較して必要なボランティア数を試算
災害ボランティアの心構え：前提	災害ボランティアの心構えとして、状況が目まぐるしく変わる中、唯一の正解があるわけではなく、被災地への想像力を喚起しておく必要性
災害ボランティアの心構え：基本	災害ボランティアの目的に照らして、自分の良心と誠意に問いかけ、その場に応じた適切な選択を考え、実行すること等
災害ボランティアの教訓	災害ボランティア保険への加入、休息・休養、相手の話をしっかり聞く、できないことは断る等
ボランティアから帰ってきたら	休養をとる、自分の体験を友達と共有する等
現場での振る舞い	軽々しい言動、写真撮影、SNS等への投稿厳禁等の注意事項
水害ボランティア作業	水害のボランティア作業、装備等
参考文献	参考文献やサイト

ンティアセンターを通じて活動を行った。在籍学生数割合で見ると社会共創学部は7%であるが、災害ボランティアに参加した愛媛大学在籍者のなかで社会共創学部が占める割合は26%を超えており大きな貢献を行ってきたといえる。

社会共創学部では災害ボランティア活動支援として以下のようなことを行った。

- ・ボランティア活動参加ガイドランス資料の作成  
渡邊准教授が (公財) 人と防災未来センター等

での経験やこれまで作成されてきたマニュアルを参考に災害ボランティア参加のためのガイダンス資料を作成し、参加学生に対してガイダンスを行った(表-2)。ガイダンス資料の内容は、今回の災害の愛媛県被害状況について死者数、床上浸水等を説明したうえで、近年の豪雨災害の被害状況と比較して必要なボランティア数を試算し、災害復旧、復興が長期間にわたる可能性を伝えた。そのあと、社会的、自然的状況が目まぐるしく変わる中で唯一の正解があるわけではなく、被災地への想像力を喚起しておくことを前提としたうえで、災害ボランティアの心構えについて、被災地の住民と社会に再び平穏を取り戻すという目的に照らして、自分の良心と誠意に問いかけてその場に合った適切な行動を考え、実行することが基本となることを伝えた。これまでの災害ボランティアで蓄積されてきた教訓について、災害ボランティア保険への加入、休息・休養をとること等10項目について説明した。そして、現場での慎むべきふるまいについて、軽々しい行動、写真撮影、SNS等への投稿厳禁などについて注意を与えた。最後に、現地で想定されるボランティア活動や手順、個人で必要となる装備などについて伝えた。

・ボランティア活動の備品、装備の購入

正課教育のための備品として長ぐつやヘルメットなどはあったがそれだけでは不足しているため、学部の経費(一部、全学からの補助含む)により表-3に示す備品、装備を学部事務職員が品薄の中、市内のホームセンターやスーパーマーケットを何度も回りながら状況に応じて必要数を購入した。

・ボランティア活動支援の実施要綱、手順フローの作成と見直し

学部での災害ボランティア支援を行うにあたって、実施要綱と手順フローを作成し、実情に合わせて見直しを行った。フローの作成にあたっては、学部の総務チーム、学務チーム、活動支援をサポートする教員、活動参加教員、活動参加学生の行動を時系列順に整理した。

・教職員の同行

学部では準正課活動として位置付けたため教職員が同行した。

### 3. 災害ボランティア活動アンケートの概要

災害ボランティア活動の実態と学生の活動意識を把握するためにWebアンケートを災害ボランティア参加学生62名に対して実施した(表-4)。調査項目としては、災害ボランティア活動の場所や日数、内容の

表-3 備品、装備の準備物品

長ぐつ(いくつかのサイズ)、マスク(防塵用、通常用)、軍手、ゴム手袋(耐突刺性、耐油性)、飲料水・スポーツドリンク、ヘルメット、スコップ(角スコ、剣スコ/大・小)、手スコ、雑巾、塩飴、救急袋、ビニール袋(汚れた長ぐつ等を入れる用)
---

表-4 アンケート調査の概要

項目	内容
調査目的	災害ボランティア活動の安全確保の実態と学生の活動意識の把握
調査対象	社会共創学部災害ボランティア派遣支援に参加した学生
調査方法	Webアンケート
調査期間	2018年7月31日～8月6日
依頼数	62名
回収数(回収率)	31名(50.0%)
調査項目	災害ボランティア活動実態(場所、日数、内容)、安全に関する実態(ケガ、体調)、ボランティアに関する意識(不安感、コミュニケーション機会、学習意欲、重要性認知、自己効力感、自己評価、今後の参加意向)、個人属性(学年、性別)、その他

実態、活動に際してのケガや体調不良に関する安全確保、災害ボランティア活動に対する不安感などの意識、学年、性別等の個人属性を設定した。アンケート調査は7月31日に電子メールでアンケート回答を依頼し、8月6日を締め切りとした。その結果、31名から回答があり、有効回収率は50.0%であった。男性と女性はほぼ半数、学年別では3年生が52%、2年生が32%を占めた。

### 4. 災害ボランティア活動に関するアンケート結果

#### (1) 災害ボランティア活動の実態

災害ボランティアの活動場所は西予市野村町をあげた人は90%、大洲市が29%、宇和島市吉田町が23%であった(表-5)。活動日数は1日間が最も多く45%、2日間が29%、4日間以上も23%を占めた。活動内容は、泥出しを81%、床・壁洗浄が52%、床はぎが32%、支援物資仕分けが36%と様々なボランティア活動に従事していたことがわかる。

学生の災害ボランティア活動を支援するにあたってもっとも注意すべき事項としては安全確保があげられる。外傷などケガについては、ケガをした人が0%、ケガをしそうなことはなかった人が90%と今回の水害に際して学部で実施した事前ガイダンスや長ぐつや耐突刺性、耐油性のあるゴム手袋やヘルメットなどの準備物は一定の適切性があつたといえる。ケガをしそうになったと回答した10%は、「床を踏み抜きそうになった」「側溝のふたを置くとときに指を挟みそうになった」「釘がささりそうになった」という経験をあげており、具体的な注意すべき場面をあげてガイダン

表-5 アンケート集計結果

項目	選択肢	度数	構成比
災害ボランティアの活動場所は？（複数回答）	大洲市	9	29.0
	宇和島市吉田町	7	22.6
	西予市野村町	28	90.3
	その他	1	3.2
何日間、災害ボランティア活動をしましたか？	1日間	14	45.2
	2日間	9	29.0
	3日間	1	3.2
	4日間以上	7	22.6
ボランティアではどのような内容の活動を行いましたか？（複数回答）	泥出し	25	80.6
	家具運搬	7	22.6
	床はぎ	10	32.3
	床・壁洗浄	16	51.6
	ごみ運搬	10	32.3
	支援物資仕分け その他	11 1	35.5 3.2
ケガをしましたか（しそうになりましたか）？	ケガをした	0	0.0
	ケガをしそうになった	3	9.7
	しそうなことはなかった	28	90.3
体調を崩しましたか（崩しそうになりましたか）？	体調を崩した	0	0.0
	崩しそうになった	6	19.4
	崩しそうにならなかった	25	80.6
ボランティアに参加する前は、ボランティア活動に不安を感じていましたか？	不安を感じていなかった	7	22.6
	あまり感じていなかった	8	25.8
	どちらともいえない	4	12.9
	不安を感じていた	6	19.4
	かなり不安を感じていた	6	19.4
普段接することが少ないいろいろな人と話す機会がありましたか？	なかった	0	0.0
	あまりなかった	1	3.2
	少しあった	8	25.8
	あった	11	35.5
	たくさんあった	11	35.5
活動をほかの人にしゃべりましたか？	しゃべっていない	2	6.5
	しゃべった	29	93.5
ボランティア活動に参加することは重要なことだと思いますか？	大いに思う	22	71.0
	思う	6	19.4
	どちらともいえない	2	6.5
	あまり思わない	1	3.0
	思わない	0	0.0
自分も被災地の力になることができると思いますか？	大いに思う	11	35.5
	思う	15	48.4
	どちらともいえない	3	9.7
	あまり思わない	2	6.5
	思わない	0	0.0
ボランティア活動に参加してよかったと思いますか？	大いに思う	25	80.6
	思う	5	16.1
	どちらともいえない	1	3.2
	あまり思わない	0	0.0
	思わない	0	0.0
今後ボランティア活動に参加したいと思いますか？	大いに思う	20	64.5
	思う	7	22.6
	どちらともいえない	4	12.9
	あまり思わない	0	0.0
	思わない	0	0.0
今後の授業や演習、実習により一層、前向きに取り組もうと思いますか？	大いに思う	16	51.6
	思う	11	35.5
	どちらともいえない	4	12.9
	あまり思わない	0	0.0
	思わない	0	0.0
学年	1年生	4	12.9
	2年生	10	32.3
	3年生	16	51.6
	大学院生	1	3.2
性別	男性	15	48.4
	女性	16	51.6

スをすることも必要かもしれない。活動中に体調を崩しそうにならなかったと回答した人が81%とガイダンスや活動中の休憩の取り方などが功を奏したといえる。一方、体調を崩しそうになった人が19%を占めており、連日最高気温が35度を超える中の活動であったため、自分自身での体調管理を徹底することをあらためて強調することが必要であろう。

### (2) 災害ボランティア活動に関する意識

災害ボランティア活動に参加する前は「かなり不安を感じていた」「不安を感じていた」と回答した人がそれぞれ19%と不安を抱えながら活動に参加した人が約4割いた。その一方で、「あまり感じていなかった」「不安を感じていなかった」と回答した人を合わせると約半数を占めており、ボランティア参加者の不安感の幅は大きいことが分かった。活動中に地元の住民の方々やボランティア、教員や他学年の学生など普段接することが少ない人と話す機会があったかどうかについては、「たくさんあった」「あった」「少しあった」と回答した人を合わせると97%を占めることから、多くの参加者が活動中にコミュニケーションをとっていることがわかった。自分の活動について94%の参加者が他の人にしゃべっていることから貴重な経験と学びをしていることが推察される。災害ボランティアの活動の重要性についても9割以上が重要であると回答しており、自分も被災地の力になることができるといえる回答が8割以上を占めたことから自己効力感も高い。そうしたこともあって、今回の活動に参加してよかったと回答した人が約97%と極めて満足度が高い結果になり、今後の災害ボランティア活動への参加意向も8割を超える人が参加したいと回答している。今後の授業や演習、実習により一層、前向きに取り組もうとする意識も半数以上が「大いに思う」と回答しており、高い教育効果が得られていることが明らかになった。

### (3) 災害ボランティアに関する意識構造

災害ボランティアの活動意向に関係する要因を明らかにするために社会的学習理論の枠組みを適用して検討する。具体的な変数としては、災害ボランティア活動に関する自己効力感と重要性認知と今後の参加意向、今回のボランティア活動での他者とのコミュニケーション機会と満足度と今後の大学での学習意欲を取り上げた。それらの変数間の関係性を共分散構造分析を用いて分析した結果を示す(図-1)。図中の数値は標準化係数で誤差変数と有意水準5%で有意にならなかったパスの表示は省略してある。モデル全体の適合度を示すGFI、AGFIが0.9以上、RMSEAが0.1以下であることから適合度の高いモデルを構築することができたといえる。

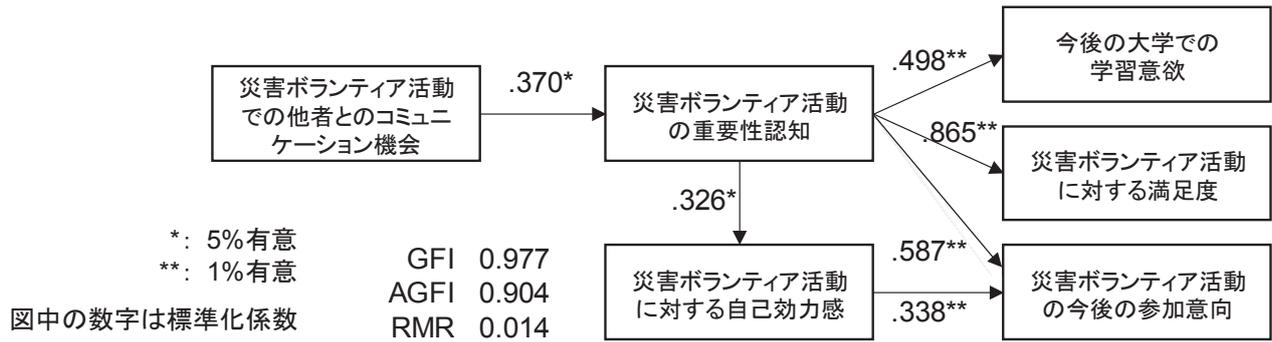


図 - 1 災害ボランティア活動に関する意識構造

表 - 6 災害ボランティア活動の今後の参加意向への効果

変数	直接効果	間接効果	総合効果
他者とのコミュニケーション機会	0.000	0.357	0.357
災害ボランティア活動の重要性認知	0.587	0.216	0.803
災害ボランティア活動に対する自己効力感	0.338	-0.020	0.318

表 - 7 今後の大学での学習意欲への効果

変数	直接効果	間接効果	総合効果
他者とのコミュニケーション機会	0.000	0.148	0.148
災害ボランティア活動の重要性認知	0.568	-0.065	0.503

表 - 8 愛大コンピテンシー

I. 知識や技能を適切に運用する能力
1. 必要な情報を収集・整理できる
2. 個別の知識や技能を相互に関連付けながら習得できる
3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現できる
II. 論理的に思考し判断する能力
4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる
5. 科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる
III. 多様な人とコミュニケーションする能力
6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる
7. 目的達成のために多様な人と協働できる
IV. 自立した個人として生きていく能力
8. 自らの個性や適性を活かして行動できる
9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる
V. 組織や社会の一員として生きていく能力
10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる
11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる
12. 地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる

災害ボランティアに参加することの重要性を認識している人ほど、また被災地に対して自分が力になれると思っている人、つまり自己効力感が高い人ほど今後の災害ボランティア活動への参加意向が高い。これは社会的学習理論で示されているように自己効力感が行動の源泉となる傾向と一致している。また、活動中に被災者の方々とコミュニケーションをとれた人ほど災害ボランティア活動の重要性を認識する傾向にあり、その場に応じた適切なコミュニケーションをとることが今後の参加意向を高めるためにも重要であることが示された。また、通常の学習理論では強化学習の観点から満足度を高めることの重要性が指摘されることが多いが、災害ボランティア活動の満足度は今後の参加意向には影響を及ぼしていない。この満足度は活動場所や活動内容によっても有意な差はなかった。これは、被害の大きさに比べて自分たちの活動による貢献の小ささなどにより自分が行うことができた災害ボランティア活動に対する満足度は低いものの、被災地で活動しているボランティアが被災地に貢献している姿を観察することによる代理強化の可能性が考えられる。あわせて、今後の参加意向に対して各変数が及ぼす効果を表-6に示す。重要性認知の直接的に及ぼす効果と自己効力感を通じて間接的に及ぼす効果をあわせた総合効果がもっとも高い。自己効力感は重要性認知の約3/8の効果で、他者とのコミュニケーションは重要性認知を経由して自己効力感と同等の効果があることが明らかになった。

次に、今後の大学での講義、演習などへの学習意欲に対しても災害ボランティア活動の重要性認知が高い人ほど意欲が高い傾向があり、他者とのコミュニケーションが重要性認知を経由して高めることが明らかになった。また、大学での学習意欲に対する効果も重要性認知の3割程度あることが分かった(表7)。

(4) ボランティア活動での学びと愛大コンピテンシーの関連性  
ボランティア活動で印象に残った経験とその経験が

表-9 災害ボランティアに関する学びの自由記述と愛大コンピテンシーとの対応

経験	学び	愛大コンピテンシー
若者が少なく年配の方々が指揮、作業をしている姿をみた。	・若者が少ない地域が被災するとより深刻な影響がでる。若者の力が必要。	4. 広い視野と論理的の思考に基づき分析・解釈できる
被災者の方がボランティアとコミュニケーションをとることで笑顔になっていた。	・大学生など若者が長期的に活動することでお互いにより経験につながる。 ・被災者と話してリラックスしてもらうこともボランティアのできることのひとつ。	6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる（多様な属性、立場を超えたコミュニケーションの力）
ボランティアの力はわずかで自分たちの活動が役に立っているのかわからなくなる（側溝の泥かき）。	・少しでもきれいになっていることは確かなので、多くの人の小さな力を集めることが大切。 ・自分から動くことが重要（指示待ちには役に立たない）。	7. 目的達成のために多様な人と協働できる
大きな被害を被った地域の人たちが協力し合っている姿を実際にみた。	・人の底力（どんな状況でも生きていかなければならない）と気力が尽きたときの危うさの実感。 ・困難な状況に直面しても積極的に生きていく態度。	8. 自らの個性や適性を活かして行動できる（新たな状況に立ち向かう力）
何も考えずにボランティア作業に集中した。	・生の実感を得られた。マインドフルネス。 ・知識や体力、精神的な充実を得られる体験をしていこうという心だけを作れた。	8. 自らの個性や適性を活かして行動できる（新たな状況に立ち向かう力）
ボランティアで来た自分たちの体や気持ちを気づかせてくれるのがわかった（飲み物、冷やしたタオル、アイス、楽しんでやろうとの掛け声等）。	・ボランティアが被災者を元気づける雰囲気作りができればよい。 ・感謝の気持ちや相手のために行動しようとする気持ちは相手に必ず届く。 ・人の温かさ、人と人とのつながりはどこに行っても存在する。 ・自分たちが被災者になったときの心構えと対応もかくあるべき。	9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる（関係性の中で自分の行動を調整する力） 10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる（社会的存在としての人間像の実感）
災害支援物資で大手企業だけではなく個人で郵送したり持ち込む人が多かった（高校生の応援メッセージ）。	・被災者の人たちからたくさんの感謝をいただいて、自分にもできることがあると実感した。	11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる（連帯感）
災害によって生活が一変した人、苦しんでいる人がたくさんいることを知った（被災者から直接聞く機会、身障者の方々の被災、自営業の方の再開）。	・多くの人たちが被災地に心を寄せるだけではなく実際に行動していることを実感した。 ・日常の生活を突然奪ってしまう災害の恐ろしさを実感。 ・今、当たり前前に生活できていることに感謝することの大切さ。 ・一つの行動選択で明暗が分かれるため、あらかじめ考えておくことが大切。 ・今後このような被害を低減させるためにどのようなことができるのかは考えていく必要がある。 ・想定外の事象に対して対応していく必要がある。	10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる（社会的存在としての人間像の実感） 10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる（ともに生きる人たちと共感する力）
住宅がある程度片付いた頃でも公共の施設は手付かずの状態であった。	・住民生活を優先することの重要性。	11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる

らどのようなことを学んだかについて自由に記述してもらった。その内容と愛大コンピテンシーの対応を示す（表-8, 9）。愛大コンピテンシーは5つの能力と12の具体的な力によって構成されている。ここでは具体的な力との対応関係を示す。

被災地の現場で年配の方々が指揮、作業している姿をみて、少子高齢化が進展している地域が被災するとより深刻な影響が長引くことを学んでいる。中山間地

域の課題として少子高齢化について講義などで学ぶ機会は多いが、平常時だけではなく災害時にも結び付けてより多面的に地域課題を考察できる機会を得ていると考えられる（愛大コンピテンシー4）。

被災者の方がボランティアとコミュニケーションをとることで笑顔になっている様子を見たり、元気づけられていると感じたりすることで、普段通り話すこと自体がボランティアのできることの一つであると気付

いている。こうした相手の意見を丁寧に聞く力（傾聴力）のもつ可能性を感じながら、様々な状況に応じて適切な対話ができるようになっていいると考えられる（愛大コンピテンシー6）。

ボランティア活動中は、被害の大きさに比べて日々のボランティア活動の貢献は小さく、被災者の役に立っているのかどうかも分からなくなるという徒労感を感じる一方で、少しずつきれいになっていく様を目にしていく中で多くの人たちの小さな取り組みの重要性を実感している。こうしたことから多くの人たちと互いに協力し合って目的を達成することの重要性を肌感覚でわかっていると考えられる（愛大コンピテンシー7）。

大きな被害を被った地域の人たちが協力し合っている姿を見て困難な状況に直面しても積極的に生きていく態度を学び、社会的存在としての自己実現のために自らが置かれている状況の中で自分の能力を活かそうとする態度を示していると考えられる。また、ボランティア作業に集中してマインドフルネス的な境地に立つことができ、精神的な充実を得られる体験を通して、新たな状況に立ち向かおうとしていると考えられる（愛大コンピテンシー8）。

ボランティアで来た自分たちの体や気持ちを気づかせてくれるのがわかり、ボランティアが被災者を元気づける雰囲気作りをしようとする態度を学び、関係性の中で自分の行動を調整しようとする力を身につけようとしていると考えられる（愛大コンピテンシー9）。

日常生活を突然奪ってしまう災害とそれに苦しむ被災地の方々の姿をみて心を寄せ、当たり前で生活できている自らの生活に感謝することの大切さに気付いている。また、自分たちボランティアが被災地の方々の感謝の気持ちを十二分に感じ取ることができていることから感謝や相手を思いやる気持ちは必ず届くという実感をしている。また、災害支援物資の仕分け作業を行う現場にて高校生の応援メッセージなど遠隔地であっても個人で被災地支援を行っているのを目の当たりにして、多くの方が被災地を思い行動に移している現実と支援物資が実際に被災地に役立っている実感を得ている。これらは、社会的存在として人間像を実感するとともに地域の人と共に、一員として生きていくという実感、共感を生んでいると考えられる（愛大コンピテンシー10）。

ニュースや新聞を通じて被災地のことは知っていたつもりでいても、被災者の方から直接話を聞いたり、自営業の方から再開の難しさを聞いたりして災害によって生活が一変した人や苦しんでいる事実を知ると、これまで講義などで学んできたことを改めて実感

を伴って被害軽減のための対策や避難行動の方法などを改めて捉えなおすことができている。また、ボランティア活動を通して地域の方々から多くの感謝をもらうことで同じ県下に住む個人としてできることを実感することができている。これらは、地域をよりよいものにしていこうとしたときに専門家として、一個人として何ができるのか、何をしなければならないのかという役割を考え直すきっかけになっていると考えられる（愛大コンピテンシー11）。

これらのように災害ボランティア活動を通じて学んだことは、愛大コンピテンシーと対応していることが明らかになった。

## 5. 結果

本稿では平成30年7月豪雨災害における社会共創学部で実施してきた災害ボランティア活動支援に関して報告するとともに参加学生アンケートから教育効果について分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- ・社会共創学部では災害ボランティア活動に延べ360名を超える学生・教職員が参加し、学部規模からみても愛媛大学のなかで被災地に大きな貢献を行ってきた。
- ・学部では災害ボランティア支援のためにマニュアル整備、備品・消耗品の購入、実施要綱・手順フローの作成、教職員の同行を行ってきた。その結果、災害ボランティアによってケガや体調を崩した学生はおらず、学生の安全確保に対して一定の効果が得られていると判断できる。
- ・ボランティアに参加した学生アンケートから災害ボランティア活動に対する重要性認知や自己効力感が高く、それらが今後の災害ボランティアへの参加意向に影響していることが明らかになった。また、普段接することの少ない様々な人と話す機会をもった学生が7割以上を占め、それがボランティア活動の重要性認知を通じて今後の参加意向に影響することが示された。
- ・今後の大学の授業や演習、実習への取り組みについても約9割が前向きな姿勢をとっており、今後の大学での学習の動機づけとして機能していることが明らかになった。
- ・災害ボランティア活動での経験を通して得られた学びは、愛媛大学学生として期待される能力、愛大コンピテンシーの論理的に思考し判断する能力、多様な人とコミュニケーションする能力、自立した個人として生きていく能力、組織や社会の一員として生きていく能力に位置付けられることが明らかになった。

今回の災害ボランティア活動支援を通じての課題を以下にあげておく。

- ・学生の災害ボランティア活動を支援するために被災地での活動の安全性を確保していくことが必要なため、災害直後から活動してきた災害調査団、防災リーダーズクラブ等の学内の関係者、県内市町村、社会福祉協議会ボランティアセンター、災害NPO等の学外関係者との情報共有と連携のための仕組みづくりを進めていく必要がある。
- ・学生がボランティア活動に参加することによるメンタル上の問題（無力感など）を抱えた学生には学生相談窓口など特別なケアを行う用意があることを周知する必要がある。
- ・災害ボランティアは突発的に必要とされることから、発災時の主管組織、募集や派遣のフロー、後方支援などの仕組みづくりを常時から行っておく必要がある。
- ・災害ボランティアは長期間にわたり必要とされることから、被災地に学生ボランティアのベースと活動のための財政的支援を行っていく必要がある。そのことが結果的に大学の社会的信頼の向上に結び付くと考えられる。

#### 参考文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 愛媛大学(2018). 「平成30年7月豪雨」への愛媛大学の対応について. <https://www.ehime-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/07/1121gouuA.pdf> (2018年12月21日現在)
- 愛媛県災害対策本部(2018). 平成30年7月豪雨による被害状況等について(第100報). <https://www.pref.ehime.jp/h12200/documents/higai100.pdf> (2018年12月21日現在)
- 飯考行・李永俊・作道信介・山口恵子・平野潔・日比野愛子(2012). 大学教育としての災害ボランティア – 「東日本大震災復興論」の開講, 21世紀フォーラム, No. 7, 11-27.
- 河合享(2011). ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか – 全国大学生調査の分析から, ボランティア学研究, No. 12, 91-102.
- ドナルド・A・ショーン(2007). 『省察的实践とは何か』. 鳳書房.
- 諏訪晃一・渥美公秀・関嘉寛(2005). 学生による災害時のボランティア活動と状況的関心 – 新潟県中越地震における fromHUS の活動から, ボランティア学研究, No. 6, 71-95.
- 山中亮・淡野寧彦・松村暢彦・砂田寛雅(2017). 社会共創学部における「学び」の教育カリキュラムデザインの構築, 愛媛大学社会共創学部紀要, Vol.1, No.1, 73-82.
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会(2018). 全社協被災地支援・災害ボランティア情報. <https://www.saigaivc.com/20181102/> (2018年12月21日現在)